関係人口と協働する【産業振興】

2023

里山資源利活用プロジェクト
竹と人と暮らしのデザイン
（房州うちわ伝統的工芸品産業・南房総学・竹あかり事業への技術的支援）

実施者

≪実施者≫　産学協働地域活力創造事業　地域コーディネーター青木 秀幸（千葉工業大学非常勤講師，合同会社いいもんだ）
南房総学サポート）千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科　加藤研究室学生６名

≪協働パートナー≫

【行　政】南房総市 市民生活部 市民課 市民協働Ｇ／商工観光部 商工課，観光プロモーション課／教育委員会
子ども教育課／総務部 企画財政課

【学　校】千倉中学校３年生 75 人，担任および関係教諭

【企業等】房州うちわ振興協議会，みねおかいきいき館，南房総市観光協会ほか

【市民団体等】千倉地域づくり協議会きずな，高家学ぼう会，竹文化振興協会千葉支部

1. 背景・目的

世界で保護・保全すべき地域「生物多様性ホットスポット」（世界36ヵ所）の一つに指定されている日本。その重要なポイントの一つが日本の里山である。今その里山が放置された竹の引き起こす“竹害”によって危機に瀕している。市内では伝統工的工芸品産業(例.房州うちわづくり）においても，女竹林の荒廃で適した太さや節間のものが減少し，幼竹をイノシシに食べられてしまう等の獣害被害も相まって毎年竹の採集が困難になっている（原料調達問題）。このような状況下で今後，竹害から人々の暮らしを守り，南房総市での暮らしや伝統的産業の拠り所となる里山との共生を図るためには「竹林を適正管理する整備手法」と「新奇で継続性のある利活用法（事業）」の開発が必要不可欠である。

そこで本プロジェクトでは，以下の目的のもと市内の竹林整備と竹の利活用の開発を進めることとする。

①竹林の整備手法の開発では，房州うちわの原料調達問題を鑑み，伝統的工芸品産業の継承の視点から原料となる女竹の効率的採集にむけた竹林の適正管理手法を開発すること

②間伐した竹の利活用法の開発では，地元市民団体主導型の事業の継続と新事業展開に対して，技術的な支援を行う

2. 活動内容

（1）房州地方の女竹林に関する竹林整備手法の開発
～房州うちわ等伝統的産業の継承の視点から～　※図1～4

房総の伝統的工芸品産業，日本３大うちわの一つ「房州うちわ」づくりにおける原料調達問題が，昨年までの産業関連業者の実態調査や関係者へ聞き取りから明らかになってきた。そこで本PJでは，昨年度より房州うちわの効率的な原料採取にむけた房州産女竹に関する竹林管理の要点を解明するため研究を開始した。本年度は以下の内容に取り組んだ。

＝活動詳細（2023）＝

・「うちわの原料に適した女竹」への認識調査（対象：うちわ職人）と要件の整理(令和５房州うちわ従事者入門講座全５回の見学等）
・実験林の候補地の現場視察と区画設定（Ｒ５年は２箇所を設定）
・実験林の調査項目の選定
・実験林の区画の周辺整備（獣害ネット張り）と生態観察開始ほか

（2）間伐した竹材活用のための新事業展開支援　※図７～８

1）千倉中南房総学「竹あかり大作戦」の学習支援【教育面】

本PJでは2022年度から新たにそれまでの知見を学校教育の現場へ水平展開する試みをスタートさせた。本年度は昨年に引き続き「竹あかりづくり」のプログラムを，千倉中南房総学の中で千倉地域づくり協議会高家学ぼう会とともに企画・運営した（12/8,千倉中,75名，２コマ90分，１～２個／人の作成，計120個程度のミニ竹灯籠の制作）。それに際しては，昨年の課題をふまえて，効率的で安全な当日運営，地域への誇りと愛着（シビックプライド）の増進，その後の神社と生徒との絆の強化などを目指して以下のような試みを行った。

＝新しい試み＝

・ミニ竹灯籠のサイズを小さく工夫（穴あけ作業の効率化）
・安全管理，体験促進のための補助を工大生に（多世代交流）
・灯籠の寄進にあたって自分の願い事も書き込み（絆の増進）
・ハート型の切り口の竹材の準備（演出の工夫）ほか

2）災害復興から始まった「南房総竹あかり」イベントの運営管理の効率化支援【災害復興・観光振興面】　※図５～６

今年で５年目を迎え，神社を訪れる観光客や周辺旅館，神社等関係者からも好評を博し，千倉の冬の風物詩としても定着しつつある南房総市竹あかり。本PJでは，これまでイベントの持続可能性を高めるべく，竹灯籠の設置における運営団体の「つくる負担」と「組み立てる負担」の半減を試みてきた。その一貫として昨年は「新固定システム」（２m程度の竹灯篭３本を簡単に繋ぎとめ地面に垂直に設置する筋交い接合）を開発し，その導入によって設置の際の必要人数の低減，組み立て所要時間の短縮への可能性が示唆された。本年度はこのシステムの実用化と現場普及を目指して以下を試みた。

＝検証＝

・新固定システム型竹灯篭ユニットの一定量の制作とその工程での課題の整理（コスト検証も含む）
・運営団体メンバーによる新固定システム型竹灯篭の組み立て検証
・継続利用による耐久テスト，デザイン性の確認　ほか

1,2「房州うちわ従事者入門講座」の第１回講座女竹の選定・伐採・皮むきの様子。3,4 第２回講座の割竹（48～64等分）の作業風景。女竹の質によって作業性が大きく左右される。
5.「南房総市竹あかり」イベント設営での「組み立てる負担」半減を目指した竹灯篭同志をつなぐ新固定システム（構成する９本の竹部材）　6. 実際の設営現場で組み立てやすさを検証。

7. 千倉中での南房総学「竹あかり大作戦」の様子　8,9 千倉中３年生 75 名の力作が高家神社の参道に飾られ奉納。女子生徒によるハートの切り口の竹灯篭。中には願い事が書き込まれた。

域学協働の工夫！

★市民団体・事業主を主役とし自立と新事業展開を助ける大学関係人口による技術支援
★地域の“本当に困った”に対する課題認識と課題解決にむけたビジョンの共有
★協働事業における途中の成果検証と改善を挟んだ伴走型の事業支援

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

・房州うちわ伝統工芸品産業支援では，房州うちわ用女竹の効率的採集にむけた実証実験において，うちわ用女竹の要件を整理でき，実験林の区画設定と一部生態観察をかつての名産地２地区でスタートさせることができた。
・「南房総市竹あかり」の設置の負担半減を目指して開発された新固定システムの現場検証の結果，必要人員の低減と時間短縮等には組み立て手順，方法のさらなる改善が必要なことが明らかとなった。また竹と金物との接合部の耐久性にも課題が残った。

(2) 教育・研究面

・市内の中学校で展開される「南房総学」の一貫として「竹あかりづくり」が導入され新たな環境教育ツールとしての展開への技術支援ができた。また実施主体となる市民団体側へも，地域学習プログラムの準備から運営までの経験の蓄積が出来た。

4. 今後の展開

本年度に引き続き房州うちわ等伝統工芸品産業支援では，原料調達問題の一助としてもらうための房州地方の女竹林に関する生態観察調査を本格化させる。また間伐した竹資源の活用策について環境教育等への有効性を検証しながら，地元団体の新事業への実装に向けた技術的な支援等も引き続き取り組む。

＊表彰・マスコミ掲載など

・「高家神社に竹灯籠　千倉中 75 人 150 基つくる」房日新聞 ,2023.12.23
・「高家神社に竹灯籠ともす」房日新聞 ,2024.1.9
・「年の瀬の竹あかり 幻想的　佐倉・志津駅南口　南房総・高家神社」東京新聞 , 2023.12.29